

# 私の一冊

一般教育等 有元 志保 先生

カズオ・イシグロ 著 『わたしを離さないで』

小鹿・谷田図書館 933/1 73

『わたしを離さないで』は、介護人をしている 31 歳のキャシー・H という女性による回想の形をとっています。キャシーの記憶の中には、子ども時代を過ごした学校での日々が大きな位置を占めています。この学校は私たち読者が知るものと似ているようで、どこか奇妙な場所です。外の世界と接触する機会の乏しさ、毎週のように行われる健康診断、そして、生徒たちが口にする「提供」という言葉…。この学校にいる生徒たちは、臓器移植のために生み出されたクローン人間なのであり、彼らが歩むことになる厳しい道が、次第に明らかになっていきます。この作品は映画化され、日本では 2016 年にテレビドラマ化もされていますが、読者がキャシーとともに、彼女たちを取り巻く謎の核心に迫っていく過程には、文字で読んでこそその味わいがあると思います。

学校を出た生徒は、介護人として提供者の世話をする期間を経て、やがては自らが提供者となります。提供は、次の提供に耐えるための回復期をはさみつつ繰り返し行われ、多くて 4 度目の手術の後に提供者は「使命」を終えます。キャシーの通っていた学校の運営者は、クローンがせめて人間らしい心を得られるようにと、生徒たちに質の高い教育を与えます。外部の世界から遮断された生徒たちは、学校を出るまでは過酷な現実と向き合うことを猶予されます。果たしてそれは彼らのためになるのでしょうか。どのみち提供から逃れられないのなら、クローンに早くから提供について確かな情報を与え、自身の使命に対する覚悟をもつよう促すことが彼らのためだ、という意見もある

でしょう。若くして一生を終えることが定められているクローンに教育は無駄だ、という人もいるかもしれません。

それでも、学校は確かに生徒たちに大切なものを与えています。臓器だけでなく、将来の可能性や、学校生活を共にした仲間など、多くのものを失っていく中で、彼らの慰めになっているのは、過去の穏やかな日常の記憶です。キャシーは学校でのささやかな出来事について、その経験を共有する仲間と語り合う喜びを得るだけでなく、語り合う相手がいなくなった後には、過去を改めて見つめ直し、自分の記憶を誰にも奪われることのない宝物として大事に守り続けます。学校で養われた豊かな精神をもつからこそ、キャシーたちは自らを待ち受ける将来について深く悩み苦しみますが、その一方で、彼女たちは精神の力によって心のよりどころを見出すことができるのではないのでしょうか。

『わたしを離さないで』で提示される様々な問題は、フィクションの世界に留まらず、私たちにとって大きな意味をもっていると思います。興味のある方はぜひ作品を手にとって、考えてみて下さい。